

平成29年度埼玉県博物館連絡協議会

後期研究会・見学会 報告

日 時 平成29年11月24日（金）

13:00～16:00

場 所 当館 講堂

季節展示室、特別展示室

参加者 32名（名簿は別紙）

内容

開会

あいさつ

・埼玉県博物館連絡協議会 書上会長よりごあいさついただく。

1 研究会の部（13:10～15:30）

◆講演

・戸田市立郷土博物館 主事（学芸員）の吉田幸一氏を講師に「戸田市立郷土博物館における博学連携の事例と課題について」をテーマにご講演いただく。

（1）戸田市の概要

・埼玉県の南部に位置し、東は川口市、北は蕨市・さいたま市、河川を境とし、西は朝霞市・和光市、南は東京都板橋区・北区に隣接している。

人口：138,741人（H29.11.1現在） 面積：18.19km²

学校数：市立小学校12校 私立中学校6校 県立高校2校

（2）戸田市立郷土博物館事業概要（平成28年度）

・展示事業：特別展（年1回） 企画展（年2回）

・教育普及事業：講座（27回、展示事業関連講座を含む）

・博学連携事業：小学3・6年生博物館事業 郷土博物館活用検討委員会
博学連携を考える研修会 出前授業

・郷土博物館入館者（平成28年度）

常設展示室 17,160人 開館日数 319日 1日平均 53.79人

特別展示室 11,021人 開館日数 141日 1日平均 78.16人

・図書館・郷土博物館・アーカイブズ・センター（H21.6.9 館内にオープン）
と3つの機能を併せ持つ戸田市の知の拠点

・職員は全14名（H29.11.10現在）

(3) 博学連携事業30年の概要

- ・昭和58年の「郷土博物館基本構想」制定、同59年の開館以来、博物館と学校教育の連携を念頭に入れた博物館活動を展開してきた。
- ・大竹指導主事（S62.4.1～H6.3.31）の頃、博物館費による小学校3年生授業のバス配車予算の確保（現在は教育政策室予算）や教職員のための戸田市立郷土博物館講習会（地域学習研修会）の開催、見学ノートの作成、体験コーナーの設置を行う。
- ・古澤指導主事（H6.4.1～H9.3.31）の頃、『郷土博物館活用の手引き書』の作成や小学6年生授業のバス配車予算の確保（現在は指導課予算）、博学連携だよりみみずくホットラインの発行（H6.4.1～ 毎月発行全78号）を行う。
- ・平成9年頃までに郷土博物館の博学連携事業の内容のベースができあがる。
- ・指導主事が中心となり、「郷土博物館活用検討委員会」を年間3回程度開催。市内小中学校から6名の教員に委員を委嘱し、郷土博物館及び博物館資料を活用した授業の実践や博学連携を考える研修会の内容について検討を行う。

(4) 郷土博物館博学連携事業の事例

- ・3年生授業（地域学習）
例年1～2月、専用のワークシートを使用し、特別展「昔のくらし展」等の調べ学習を通し、自分たちが暮らす地域の移り変わりを学ぶ。
- ・6年生授業（歴史学習）
例年5～6月、専用のワークシートを使用し、常設展示室における戸田市内の考古資料等の調べ学習を通し、市内の縄文時代から古代までについて学ぶ。
- ・出前事業、館内受入、資料貸出
- ・博学連携を考える研修会：実践事業報告と講師による講演会を年1回実施。
- ・教職員研修：初任者や5年経験者を対象に学校現場での博物館活用を啓発。
- ・中学校社会体験チャレンジ事業（3日間）
郷土博物館では3校から各2～3名の生徒を受け入れ、史料整理・保存、博物館授業、講座準備の補助など学芸員の仕事を体験する。

(5) 博学連携事業の課題

①博学連携とは…

- ・博物館が学校教育を援助することであり、教員が博物館（学芸員）をいかに使いこなすことができるかにかかっている。

②6年生博物館事業と3年生博物館事業と昔のくらし展

- ・本来なら、解説は学芸員、主体的に授業を進めるのは教員と役割分担する。
- ・平成30～31年度の大規模改修に伴う博物館授業の中断が懸念される。
- ・郷土博物館職員だけで授業の運営は困難

③活用検討委員会・博学連携を考える研修会の形骸化

- ・前者は会議であるため定例化するとマンネリ化しやすい。後者は単発の実践授業の報告のため、次年度以降実施の同一授業へのフィードバックが難しい。

④小学校との連携

- ・開館以来事例を蓄積しており、比較的コミュニケーションも取れている。

⑤中学校との連携

- ・小学校と同じように博物館授業を行うのは難しいため、中学校のカリキュラムに合わせた活用事例の洗い出しや、指導案の作成、授業実践からのパッケージ科などが必要。

⑥高等学校との連携

- ・現在、市内2校の高校教員と郷土博物館の交流はない。指導要領には博物館や社会教育施設、文化施設が登場するため、高等学校とも連携は可能。

⑦再び博学連携について

- ・実物資料に接し、感動するだけの授業で終わらないようにするためには、教員と学芸員が、連携する授業における博物館授業の位置付けや目標の設定を相互に理解する必要がある。

(6) 質疑応答

※以下の4館から、各館における博学連携の取り組みについてコメントをいただいた。

①さいたま市立博物館

- ・大宮市立博物館の頃から指導主事1名を配置しており、年2回(夏・冬)の小学生向けの展示や学校見学、出張展示を行っている。市合併に伴う学校数や児童数の増加により、指導主事への負担が重くなっている点が課題である。

②春日部市郷土資料館

- ・報告にあった事例のようなことをできる範囲で実施している。また、市立小学校24校中6校で、民具や土器、パネルを展示する郷土資料室を整備した。今後の課題は使用率や活用状況の把握である。地域の歴史を学ぶことができる「学校の博物館」として学校—地域—家庭を繋ぐファクターとなればよい。

③埼玉県平和資料館

- ・現時点で、今年度の「ピースキャラバン」実施校は小中学校合わせて約60校(9割以上が小学校)。最近は、広島県や長崎県、鹿児島県、沖縄県への修学旅行の事前学習を目的とした高校の利用も多い。

④埼玉県立文書館

- ・文書館と高校教育指導課の主導により、高校生を対象に文書館収蔵史料を用いた授業モデルの実績がある。史料を館外に持ち出すことは難しいが、生徒が文書館で実物の史料に触れるアクティブラーニング型であれば可能ということとなった。生徒は読解力があり、かなり史料を読むことができた。また、教科書以外の判断力が培われ、歴史について自由な意見交換が行われた。さらに、学芸員になりきって、史料のキャプションの作成を行ってもらったが、利用者目線を意識した良いものができあがった。

戸田市郷土博物館の多岐に渡る事例の報告及び参加者の皆様との活発な意見

交換により、埼玉県博学連携について考える大変有意義な研究会となった。

◆報告

- ・埼玉県博物館連絡協議会 緊急時相互支援検討委員会 田中委員長より、「平成28年度日本博物館協会研究協議会に参加して」をテーマにご報告いただく。

(1) 熊本地震について

- ・平成28年4月14日 前震 県内最大震度7 マグニチュード6.5
- ・平成28年4月16日 本震 県内最大震度7 マグニチュード7.3

(2) 研究協議会における報告内容

- ①被災したが館・展覧会を再開した施設（3館より事例報告）
- ②直接被害はなかったが展覧会を中止・全資料を返却した施設（1館）
- ③被害の対応へ課題を抱える施設（1館）
- ④博物館の「本務」として実施するレスキュー活動（2館、ネットワークセンター）

(3) まとめ

- ・日頃からの「備え」と「普段の人的つながり」の重要性。
- ・大規模災害発生時、県民の命と文化財を守るため、博物館がどう対応するか。
- ・博物館等の公共施設には人々が日常を取り戻す体験（ソフト事業）や空間を提供することが求められている。

2 見学会の部（15：30～随時解散）

- ・講堂で、埼玉県立文書館 新井学芸主幹及び当館 関口主任学芸員による解説を聞いた後、文書館収蔵文書展「関東管領上杉氏と埼玉の戦国武将」及び特別展「上杉家の名刀と三十五腰」を見学。（自由見学・随時解散）

※当初は、各展示室（季節展示室・特別展示室）で学芸員による展示解説を予定していたが、参加者が25名に達し、展示室での実施が難しい状況となったため、上記の対応となった。



研究会（講演）の様子



研究会（報告）の様子